



関西学院大学リポジトリ

Kwansai Gakuin University Repository

<シンポジウム>科学研究の移り変わりと米国外交： 1920年代から1950年代まで

著者	藤岡 真樹, 関学西洋史研究会
雑誌名	関学西洋史論集
号	40
ページ	3-4
発行年	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027651

科学研究の移り変わりと米国外交 －1920年代から1950年代まで

報告者 藤岡 真樹（京都大学国際高等教育院非常勤講師）
文責 関学西洋史研究会

はじめに

(1) 本報告の目的

①アメリカの学会における歴史研究の現状→外交研究と接続が困難になっている状況を確認する

②①の要因を1920年代から1950年代のアメリカの政治と科学研究を対象に考察する

(2) 本報告の背景

・近年のアメリカ学界における科学史研究は、第二次世界大戦以後に現出した“Big Science”なる研究の体制および状況について、連邦資金の科学研究への投入量の増加という観点から説明してきた。しかし、同時に、この“Big Science”に対しては市民領域からの疑念が寄せられる。それは・・・巨大な科学研究が人々の日常社会生活にいかなる効用をもたらすのかを市民が科学者に説明を求めたものであった。

・アメリカの学界における科学研究は、あくまで「アメリカ国内」の問題として扱われてきた。そのことは、科学史研究からは外交という視点は、ほぼ失われてしまっているのが、報告者の実感。

・そこで本報告では、まず1920年代から1950年代までのアメリカの科学研究の歴史を振り返る。そのうえで、科学史と外交史の接合のネックについて、第二次大戦以降のアメリカで生じたある2つの法律の制定過程に注目していく。

第1章 20世紀初頭の科学研究

(1) 20世紀初頭の科学研究

(2) 大恐慌と第二次世界大戦の大きな影響

第2章 終戦後から1950年代までの科学研究

第3章 大学人の連帯的思想－原子方法をめぐって

第4章 科学者と国家との間のズレ「ニューディール」と「民主主義」についての理解と認識をめぐって

- (1) 先行研究
- (2) 科学者と国家の「ニューディール」
- (3) 科学者と国家の「民主主義」

おわりに

アメリカの学界で主流とされる科学史研究においては、ときに「ビッグ・サイエンス」と呼ばれる科学研究の体制の形成に2つの側面からアプローチしようとしている。ひとつは、連邦政府をはじめとする機関がどのような意図でどの程度の資金を科学研究に提供したのか、そのなかで、科学研究はいかなる影響を「受けたのか」について解明することで、連邦政府、軍部、軍需産業への大学の学知への影響を批判的に炙りだそうとしている。

もう一つのアプローチは、戦後アメリカの科学的成功≡「ビッグ・サイエンス」成功の秘訣を、アメリカ人の国民性に求めるものである。たとえば、戦後のアメリカ人科学者は、成功の秘訣として、アメリカ人には伝統的な価値を打ち破る進取の精神があり、これはアメリカの「自由」の理念の体現であると捉えたのである。

しかし、これらはいずれもアメリカの科学史研究がアメリカの国内の権力および国内の社会にいかなる効用を与えてきたかというアメリカ国内の議論であって、ここに外交を組み合わせると論じるのは、たいへんな苦難をともなうことになろうと考えられる。

もっとも、ここには、研究のフロンティアとしての科学者と外交政策者との関係、あるいは科学知と政策知との関連とそれらの歴史的展開という刺激的な論点が存在している。これらを明らかにするには、少なくとも1960年代から1980年代後半までの長いスパンでの研究が必要であろう。

(当日配布のレジユメをもとに、編集部にて作成)